

理論機関誌創刊号目次

- | | | |
|---|------------------------|------|
| 1 | イグレン理論誌の発行にあたって | 芝 忠 |
| 2 | イグレン 30 年から学ぶこと | 芝 忠 |
| 3 | 地域活性化私論 私の秋田移住の 7 年間 | 宮川 豊 |
| 4 | 国際協力機構（JICA）本邦研修実施報告 1 | 加藤文男 |

理論機関誌第 2 号目次

- | | | |
|---|--------------------------|------|
| 1 | 「脱原発」で考える 第 32 回定期総会記念講演 | 金子和夫 |
| 2 | 「中小企業振興条例」の具備すべき内容とは何か | 愛 賢司 |

理論機関紙第 3 号目次

- | | | |
|---|------------------------------------|------|
| 1 | 異業種交流シフト 21 と企業視察研修会について | 有村千里 |
| 2 | 「神奈川県中小企業・小規模企業活性化推進条例」の
充実のために | 愛 賢司 |
| 3 | 学生は中小企業の広告をどう評価しているか | 芝 忠 |
| 4 | 新しい時代の茶の湯 | 渋谷英明 |
| 5 | 国際協力機構（JICA）本邦研修実施報告 2 | 加藤文男 |

理論機関誌第 4 号目次

- | | | |
|---|-------------------------|------|
| 1 | 公設試験研究機関の役割に関する考察 | 芝 忠 |
| 2 | モノづくりの効率化へ向けて | 山本俊夫 |
| 3 | フクシマ復興応援ネットワークの支援活動報告 | 加藤文男 |
| 4 | 県内の「中小企業振興条例」の到達点と今後の課題 | 愛 賢司 |
| 5 | 国際協力機構（JICA）本邦研修実施報告 3 | 加藤文男 |

理論機関誌第 5 号目次

- | | | |
|---|----------------------------|-------|
| 1 | 地球温暖化による極端気象に対応した水災害警報システム | 伊藤幸彦 |
| 2 | 重心位置測定器を開発して「特許をとれたぞ！」 | 横須賀健治 |
| 3 | わが国の異業種交流活動の発展史 その 1 | 芝 忠 |
| 4 | 身近な環境と健康 1 | 早川成昭 |
| 5 | 国際協力機構（JICA）本邦研修報告 4 | 加藤文男 |

理論機関誌第 6 号目次

- | | | |
|---|----------------------|------|
| 1 | わが国の異業種交流活動の発展史 その 2 | 芝 忠 |
| 2 | 身近な環境と健康 | 早川成昭 |
| 3 | 「中小企業振興条例」と「経済民主主義」 | 愛 賢司 |

理論機関誌第 7 号目次

- | | | |
|---|-----------------------|------|
| 1 | 大型モータ修理技術の一大革命 | 藤本俊美 |
| 2 | コラム集「春夏秋冬」その 1 | 宮川 豊 |
| 3 | 現代 IT 社会におけるイグレンの存在価値 | 橋本真幸 |
| 4 | わが国の異業種交流活動の発展史 その 3 | 芝 忠 |

5 テクニカルショウヨコハマ 2018 に参加

芝 忠

理論機関誌第 8 号目次

1 「高周波衝撃弾性波法」による非破壊調査システムの開発

伊東 修 石川常夫

2 マス・カスタマイゼーション化を実践する宝電機工業

加藤文男

3 コラム集「春夏秋冬」 その 3

宮川 豊

4 北海道地震に遭遇して

芝 忠

5 製造業の品質不正問題を考える

加藤文男

理論機関誌第 9 号目次

1 ロボット・ドローンセンターで減災防災社会に貢献

伊東 修 石川常夫

2 コラム集「春夏秋冬」 その 3

宮川 豊

3 ものづくり交流・制作研究会報告

芝 忠 國重正雄

岡田 俊 加藤文男

4 最近の資材購買と海外調達事情

加藤文男

理論機関紙第 10 号目次

1 創業 100 年企業を目指して

尾下浩一

2 まんてんプロジェクト発足のころ

芝 忠

3 イノベーションの変化と対応する企業

加藤文男

4 基本に戻ろう企業経営

愛 賢司

加藤文男

編集後記

当イグレンの事務所を閉鎖しなければならない事態など想定外であった。周辺に感染した人がいてもその存在がわからず、本人も感染したかどうかともわからず生活することを強られる。とにかく人と直接会わないなど密にならないことが最良の対策である。目に見えない新型コロナウイルスとの戦いは、予想以上に厳しい。人と会い、話をし、アイデアを交換し、問題の解決と改善を図る異業種連携活動するわれわれにとって人と会わないことがこれほど不便であることを理解するに十分すぎることである。幸い、Eメールという情報の提供や交換手段で短期間ならば、間に合わせることはできる。新型コロナウイルス医療に詳しい方よりこの手段で貴重な情報を提供していただいたので共有したいので紹介した。

次号第 12 号は、2021 年 1 月を発行予定しています。できるだけ広い範囲から自由な内容で多くの方々のご投稿を歓迎します。

締め切りは、2021 年 1 月 5 日です。